

僕が大きくなるまで

小川未明

青空文庫

小学校しょうがっこうにいる時じぶん分ぶんのことでした。ある朝あさの時間じかんは、算術さんじゆつであつたが、友吉ともきちは、この日ひもまたおくれてきたのであります。

「山本やまもと、そう毎日まいにちおくれてきて、どうするんだね。」と、先生せんせいは、きびしい目めつきで、友吉ともきちをにらみました。そして、その時間じかんの終おわるまで、教壇きやうだんのそばに立たたせられたのです。ほかの生徒せいとたちは、先生せんせいから宿題しゅくだいの紙かみをもらったけれど、友吉ともきち一人は、もううことができませんでした。

鐘かねが鳴なると、生徒せいとらは、先さきを争あらそつて廊下ろうかから外そとへかけ出だしました。そのとき、良一りやういちは、先生せんせいが教員室きやういんしつへいかれる後あとを追おつたのです。

「先生せんせい、山本やまもとくんは、働はたらいているので、遅刻ちこくしたのです。」と、いいました。この意外いがいな報告ほうこくに、先生せんせいは、びつくりしたようすでした。

「そうか、なにをしているのだね。」

先生せんせいは、良一りやういちの顔かおを見みられました。良一りやういちは、ついこのあいだ、友吉ともきちが新聞配達しんぶんはいたつをしていみるのを見みたことを話はなしたのであります。

「よく知らせてくれた。だが、なるだけ時間じかんにおくれないようにいつてくれたまえ。」

先生の声は、和らいで、目には、愛情がこもっていました。

そんなことがあってから、二人の少年は、仲よしとなりました。高等科を卒業するころには、たがいに家庭の状況も異なつて、良一は、電気に興味をもつところから、そのほうの学校へいったし、友吉は、農業の学校へ入ることになりました。

「僕も、君と同じ学校へいきたいのだけれど、叔父さんが、農業がいいだろうというし、そうきらいでもないから、そうすることにしたのだよ。」と、友吉は、良一に向かつて、いいました。

「学校を出たら、大陸へいきたまえ。」

「君は。」と、友吉は、きき返しました。

「僕も、支那か満洲へいきたいんだが、お母さんが年を老っているから、まだどうするか考えていないのさ。」

「三年も、四年も後のことだから。」

「あは、は、は。」

「学校が異うと、いままでのようにあわれないね。それに、僕の家では、すこし遠くへ

越すんだよ。越しても、僕、ときどき遊びにくるから。」

「所を知らしてね。」

短いズボンをはいた、二人の少年は、いつまでも道の一所に立つて、名残おし
 そうに話をしていました。

友吉からは、その後なんの便りもなかったのです。やがて、翌年の春がめぐつてきました。

ある日、突然友吉が訪ねてきました。

「小西くん、花を持ってきたから、植えておかない。」と、新聞紙に包んだ、草花を渡しました。香りのする青い花が、咲きかけていました。

「きれいだね、これは、なんとという花なの。」

友吉は、外国種の花の名をいつたけれど、良一は、すぐには覚えられませんでした。とにかく、後から鉢を見つけて、植えることにして、友吉を自分のへやへつれてきました。二人は、小学時分の友だちの話をしたり、今度の学校の話をしたりしました。良一の机の上には、電池や、真空管や、コイルや、ヒューズや、いろんなものがならんでいるのを、友吉は、物珍しそうにながめていました。

「いろいろの機械があるね。」

「僕、ラジオを組み立てようと思つて、ならべたんだよ。」

「ふうん。」

「これは、僕が造つたモーターだ。」

良一は、机のそばにあつた、手製のモーターを取り上げて見せました。電池を通せばまわるまでに、なかなかの苦心がいつたのです。

「これを君が造つたの。」

「君、モーターが好きかい。」

「見ているだけでも、不思議な力が感じられて、好きなんだよ。」

「じゃ、君にあげよう。」

「えつ、ほんとうにもらつてもいいの。」

良一は、友だちが、喜ぶ顔を見て、満足そうにうなずきました。

友吉が、自転車に乗つてきたので、良一も、自分の自転車を引き出して、二人は、散歩に出かけたのです。晩春のやわらかな風に吹かれながら走りまわりました。道端に、粗末な長い建物があつて、窓が開いていると、伸び上がるようにして、良一は通りまし

た。うす濁つたような仕事べやに、青白い火が、強度の熱で燃えていました。モーターの、うなる音がきこえました。たくさんの職工が、働いていました。鉄と鉄の打ち合う音が、周囲に響きかえっていました。

「工場だね。」と、友吉が、過ぎてから、いいました。いつしか、二人の自転車は、青々とした、麦畑の間の道を走っています。遠くの空が、緑色の水のようにうるんで、そこには、夢のような白い雲が、浮いていました。

「いい景色だな。」と、良一が、叫びました。

「僕の学校へおいでよ、花園を見せてあげるから。」と、友吉が、いうと、良一の目に、先刻もらつたような、青い花や、赤い花の、見わたすかぎり咲き誇る、美しい花園が映じたのであります。池の畔へ出ると、若い人たちがボートをこいでいました。遅咲きの桜の花は散つて、水の上に漂っています。もうどこからか、かえるの音がしました。ふたり、少年は、ベンチに腰を下ろして、ぼんやりと四辺の景色に見とれていました。それから、また自転車を走らせて、きたときの道をもどるころには、空は、曇つて、村々の新緑が、いちだんと銀色に光つてかすんでいました。

ある橋のところ、二人は、左右に別れたのです。友吉は、良一からもらつたモーター

一の包みを高く上げて、振り返りながら走つていきました。良一は、家へ帰ると、友吉からもらった草花を鉢に植えて、如露で水をやりました。清らかなしずくが葉の間に伝つて、下の黒い土の中へ浸みていきます。

その夜、良一のお母さんは、頭が重いといつて、先に休まりました。良一は、いつまでも机に向かつて、勉強をしたのでした。

「お母さんに、早く楽をさせてあげたい。」

そんなことを考えながら、壁の方へ頭を向けると、山本からもらった花が、かわいらしい影を落としていました。

山は静かで、ほととぎすが、昼間から鳴いていました。かつこうも、うぐいすも、鳴いていました。ふもとの高原には、紅いつつじの花が、炎の海となつて展がっていました。そこは、山国の小さな発電所でした。良一は、ここへ勤務したのです。

「お母さん、こんなところで、さびしくありませんか。」

「いいえ、おまえのいるところなら、もつとさびしくたつてかまわないよ。」
年老つたお母さんは、にこにこしていられました。目がさめると、良一は、空想したことを夢に見たのでした。

昨夜、頭が痛むといつて、早く床につかれた母親は、今朝は早くから、働いていました。

「お母さん、お気分はいかがですか。」

「もう、よくなりました。」

良一は、母の健康なのが、なによりもうれしかったのです。

「お母さん、僕が、大きくなるまで達者でいてください。来月から、昼間働いて、夜学にいけますから。」

「そんなことをして、おまえの体がつづきますか。」

「だいじょうぶですとも、これ、こんなに太っているでしょう。」

良一は、腕をまくつて見せました。このとき、母親の目には、涙が光りました。

授業の休み時間に、廊下へ出ると、壁には少年工募集の工場のビラが貼られていました。時勢は、いまや少年群の進出を待ち受けているのです。そこには、やはり良一と同じような境遇の少年が、同じ意志と希望に燃えて、熱心に目を貼り札にさらしていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「僕《ぼく》が大《おお》きくなるまで」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕が大きくなるまで

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>